

<卒論>琉歌にみる「しほらしや」の美意識

著者	柴田 和恵
雑誌名	日本文学誌要
巻	50
ページ	120-127
発行年	1994-07-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019773

琉歌にみる「しほらしや」の美意識

柴 田 和 恵

一、序論

記紀歌謡、万葉集にみられるように、日本文学が抒情をおびた文学から出発しているのに対し、沖縄文学は呪禱、叙事、劇という文学のジャンルをすべてもっている文学である。私たちは、言語も文化も日本文学と源を同じくする沖縄文学に、文学の発生の姿や文学の史的発展の姿をみ、より豊かに文学を探っていくことができる。私は、世界四大文学のジャンルをすべてもっている沖縄文学の中から、琉歌を取り挙げてみたい。

琉歌は沖縄本島を中心に歌われたウタで、八・八・八・六の三十音から成り立つ抒情文学である。

琉歌にはさまざまな感動が歌われている。それは恋の喜びであったり、生きざまの苦しみであったり、人の心に映る喜怒哀楽である。人の心を動かすことが感動であるなら、「美」を意識して心を動かされる感動に、私は心を寄せたい。

琉歌世界を生きた人々がどんなものに美を感じたのか、またどうして美しいと思ったのか、その心の感動が歌い上げられた世界をみていきたいと思う。

この論文では、琉歌世界の美感を表現するいくつかの語のうち「しほらしや」という語を取り挙げ、その抒情の世界をみていきたい。実際に琉歌解釈をしながら、美しい事物をとらえるとき、どういう感じ方であらえているかを見ていく。

この論文で取り上げた琉歌は、『標音評釈琉歌全集』から取り挙げたものである。

二、本論

第一章 言葉の成り立ち

国語の「しほらし」の語源と意味

琉歌世界で「しほらし」と表記されている沖縄古語の「しほら

し」は、国語の「しほらし」と同根語である。

「しほらし」の意味は『日本国語大辞典』によると、①上品で優美な様子である。②ひかえめで従順な様子である。③かわいらしい、可憐である。④けなげな様子である。感心である。殊勝である。となっている。

この国語の「しほらし」の語源は、『大言海』によると「萎るる意ナラム」とあり、歴史的仮名遣いでは正しくは「しをれ」と書くのがよいようである。しかし、国語の「しほらし」は室町期になるまでみられず、『芭蕉俳諧の精神』赤羽学)、芭蕉のころには蕉門が「しほり」の表記を用いているように、「しほり」と表記されることが多くなってきたようである。

「しほらし」の語源の「萎る」には、下二段活用の自動詞と四段活用の他動詞がある。

では実際に「萎る」の用法を、万葉集、古今集、新古今集、玉葉集の和歌の中から取り挙げてみていく。

事繁み

相問はなくに

梅の花

雪に萎れて

移ろはむかも

(万葉集 卷十九 四二八二)

用事にとりまぎれて、尋ねないでいるうちに、梅の花は雪にしておれて、散ってしまうだろうなあ。

この万葉集にみられる「萎る」は、下二段活用の自動詞で、草木などが生氣を失ってぐったりする意で使われている。

吹くからに

秋の草木の

しをるれば

むべ山風を

嵐といふらむ

(古今和歌集 卷五 二四九 文屋康秀)

ちょっと吹くだけで、たちまち秋の草木がしおれるものだから、なるほどそれで人は山の風を「荒らし」と呼び、山風を合わせて嵐の字を作ったのだろう。

この古今和歌集の「萎る」は、下二段活用の自動詞で、草木がたわみ弱る意である。

秋風に

しほるる野べの

花よりも

むしの音いたく

かれにけるかな

(新古今和歌集 卷五 五一〇)

秋風に吹かれて弱り枯れる野の花よりも虫の声の方がひどくかれてしまったことだ。

この新古今和歌集にみられる「萎る」は、下二段活用の自動詞で、弱り枯れるという意である。

秋風は

軒端の松を

しをる夜に

月は雲居を

のどかにぞ行く

(玉葉和歌集 秋下 六七八)

秋風が軒のはしの松をしおらせる夜、月は空をのどかに流れていく。

この玉葉和歌集の「萎る」は四段活用の他動詞で、萎れさせるの意である。

このように「萎る」には、下二段活用の自動詞と四段活用の他動詞があり、萎えるとかたわみ弱るという意味で使われていた。しかし、万葉集時代には下二段活用の自動詞が使われ、後になって四段活用の他動詞が使われるようになったようである。

国語の「しほらし」は四段活用の他動詞から派生したものである。

第二章 琉歌世界の「しほらしや」の抒情を探る

・「しほら」

琉歌語として使われる「しほら」は形容詞「しほらし」の語幹で

ある。この「しほら」が独立して名詞として使われるとき、「恋人」「愛しい人」の意で使われる。『標音評釈琉歌全集』から「しほら」が使われている琉歌を調べ、琉歌世界での「しほら」の用法と抒情の世界をみていきたい。

忘れられめしほらと

飽かぬ別れ路の

名残り有明の

月にとめて

(波照間節 物慶筑登之)

恋人と別れた名残りは、いつまでたっても忘れられるものではない。その面影は有明の月を見る度に思い出される。

有明の月を見る度に思い出されるほど忘れられないのは、愛しい人との別れであったからである。また愛しい人であったからこそ、その別れは一層悲しいものであり、いつまでも忘れられないのである。作者は月を見ても月を見ているのではなく、その姿に恋しい人を見ているのである。月を見ても恋しい人を思い出すのは、作者の視覚は月をとらえているのであるが、作者の心は月の面影に恋しい人を思い出して重ねて見ているからである。いやそれ以上に作者の心の中はもう恋人の面影でいっぱいなのであり、月に恋人の面影を重ねるどころか、別れた恋人のことだけを考えているといってもよいだろう。そのくらい愛しい恋人であったのだろう。

糸の柳と

牡丹の花と

しほらが姿や

あれはなさけ

(柳節 読み人しらず)

柳は枝が糸のように垂れているのが美しく、牡丹は花の王といわれるその福福しい大きい花が美しく、愛らしい女性はその愛情によって一段と美しく見える。

この歌は、柳の枝が糸のように垂れていたり、牡丹の花が大きく美しく咲いているのがすばらしいように、物はすべてその本来の姿を保っているのが美しく優れているといっている。柳の美しさが枝が垂れていること、牡丹の花の美しさが大きい花であることならば、女性の美しさはその愛情である。愛らしい女性をその女性の愛情によって一段と美しく感じるというのは、女性の愛情が男の心にしみいつているからである。

以上のように、いずれの「しほら」も「恋人」とか「愛しい人」という意味で使われていたが、琉歌の中で歌われている「しほら」、つまり「恋人」への愛情は深いものばかりであった。「しほら」が「恋人」の意に使われるのは、愛すべきものが常に美的なものであり、美を人間に感じてそこから恋が芽生えているからだと思われる。

美を人間に感じるといっても、恋人の愛情にふれて恋人をより一層美しいと感じたりするように、愛情に心を動かされて感じる美である。奥ゆかしく、しとやかな美しさというものは、愛情をもってみないと感じられない、魅かれない美しさである。愛しい人であるからこそ、その人の奥ゆかしさやしとやかさに、より一層の美を感じる

じ、ますます魅かれていくのだろう。愛しい人のことは誰でも全身全霊をこめて思うから、その人のしとやかさ奥ゆかしさの美が感じられてくるし、そんな美しさがまたいじらしいのであり、そこまで美しさを感じるのやはり愛しい人だからこそなのである。

・「しほらし」

「しほらし」は形容詞で、四段活用その他動詞「しをる」から派生した国語の「しをらし」と同根語である。「しほらし」が琉歌世界で形容詞として使われるとき、対象を修飾して、「ゆかしい」「美しい」「可愛らしい」の意で使われる。『標音評釈琉歌全集』によると「しほらし」が修飾している対象は十八例あった。その対象は、句(九例)・思無蔵・思童・お情・お肝(二例)・い言葉(いは接頭語)などであった。

ここでは、「しほらし」が使われている琉歌を取り挙げ、琉歌世界での「しほらし」の用法を調べていくとともに、どのような抒情を歌っているかをみていきたい。

語らてもしほらや

しほらし思無蔵が

しほらしごと語る

雪の齒茎

(相聞歌 小橋川朝真)

話をしてもゆかしいし、姿をみてもゆかしい彼女が、ゆかしいことを語る雪のような真っ白い歯が美しい。

この歌は、話をしても姿をみても心が魅かれる恋人の、これまた可愛らしいことを言う口元の齒の白さまで美しいといっている。

恋人の言うことを為すこと、すべてが美しいと感じている。

待ちかねる人の

面影よ立てて

しほらし匂送る

花のなさけ

(相聞歌 具志頭朝香)

待ちかねている人の面影をしのばせてゆかしい香を送る花の情が嬉しい。

この歌は花のゆかしい香をかぐと、恋人の面影がすぐ目の前に現れる心地がするといっている。

花のゆかしい匂は、恋人と同じ匂がするからなつかしくもあり、嬉しいものなのであろう。恋人と同じ花の匂が漂ってくると恋人の面影が目の前に現れるような心地がするのは花の匂に恋人の匂をだぶらせているのであり、恋人の匂から恋人の面影をも連想しているからなのである。しかもその匂はゆかしい匂なのである。作者に花の匂から恋人を連想させ、恋人の匂いから恋人の面影を眼前にちらつかせるのは、作者が恋人に魅かれていて恋しく思っているからだらう。このとき匂は、作者に恋人を連想させる大切なものとなっている。

以上のように、「しほらし」の歌われた対象は、作者の心に深く

浸み入り、より一層の感動を呼びおこすものであった。

「しほらし匂」「しほらし思無蔵」と思われるのも、愛情が芽生えているから感じられるものであり美しくもなるものであろう。琉歌に歌われた「しほらし」は、愛情をもって感じられる美しさの抒情の世界であるといえよう。

・「しほらしや」

「しほらしや」は、形容詞「しほらし」の語幹「しほら」に接尾語の「さ」に該当する「しや」がついたものである。「しほらしや」は「美しい」「可愛い」「すばらしい」「奥ゆかしい」などの意味で使われる。『標音評釈琉歌全集』によると、「しほらしや」が使われている琉歌は匂に関係するものが十六例、音に関係するものが八例、声に関するものが十例あった。

ここでは、「しほらしや」が使われている琉歌を取り挙げ、「しほらしや」の用法とどのような抒情が歌われているかをみていく。

沈や伽羅とぼす

お座敷に出ちて

踊るわが袖の

匂のしほらしや

(沈仁屋久節)

沈や伽羅の名香をたいて、香のふくいくたるお座敷に出て踊ると、わが袖までも匂のゆかしさが感ぜられて、えもいわれぬ気持ちのするものである。

『標音評釈琉歌全集』によると「昔の上流家庭では貴人の客がある場合に沈や伽羅の名香をたくのが一種のもてなしであつたらしい。また各種の踊りの衣裳も用意して、その家の息男息女などに各種の舞踊を演じさせ、客の観覧に供したようである」とある。そこはかとなく香る名香もさることながら、その名香の移り香が匂って、くことに格別な思いがあつたのであろう。

名香の匂もすばらしいだろうが、名香を薫いて客人をもてなす喜び、客人の前で踊るわが袖にまで名香の移り香が漂ようそのうれしさ、そういった感動がなんともいえぬゆかしい匂となつて漂ようのであろう。

初春になれば

うれしことのせて

弾きゆる三味線の

音のしほらしや

(賀頌 真栄城守候)

初春になれば、うれしい情を三味線に合わせて弾く音が、心地よいものだ。

初春になつてうれしいと思う気持ちをこめて弾く三味線の音が、聞いているものにとつてもうれしいものだったからであらう。三味線の音も春の訪れを喜んでゐるような弾んだ音に聴こえることであらう。

春の花盛り

深山鶯の

匂しのでほける

声のしほらしや

(中城はんだ節)

春の花盛りになると、深山鶯が梅の花を恋慕うて来て、うれしそうにさえずっている声が、誠に美しいものだ。

鶯は、春に忍び寄るようなうるんだ含み声で鳴きだす。作者も春を心待ちにしていたであらう。この歌には鶯の含み声と作者の心待ちにしていた春の訪れの喜びが重なっている。

以上のように琉歌全集の中から三例の「しほらしや」についてみてきた。「しほらしや」は匂・音・声などと関係して詠まれ、「美しい」「可愛い」「すばらしい」などの意で用いられていた。琉歌の中で歌われている「しほらしや」は、匂や音や声などに対して共鳴して感じられる「すばらしさ」であり、「美しさ」であった。

わが袖に名香がうつって匂うのがすばらしいと思われたりするのには、名香や鶯の声が心魅かれるものであるにはちがいないのだが、それらが心に浸み入り心を動かされ、深々とした美的情緒となるからであらう。

ところで、「しほらしや」は匂を詠み込んで歌われることが多い。その半数以上が匂を詠み込んでゐるといってよい。

そこで、匂と「しほらしや」の関係を探りながら、匂をうたう琉歌にふれてみたい。

おそば馴れ染めて

別れゆる袖に
匂移ちたばうれ
伽にしやべら

(百名節)

おそばに馴れ親しんで暮らしたので、お別れするのがつらくてたまりません。どうしても別れなければならぬものなら、別れる袖にあなたの匂を移して下さい。別れて後の慰めにしましょう。

この場合の匂は、恋人と別れた後に慰めになるような大切なものとして捉えられている。

恋人と別れたあとの悲しみを慰めてくれる匂に、「しほらしや」の美感が感じられる。

たづねゆる花の
近くなてさらめ
忍ぶ身が袖に
匂立ちゆす

(相聞歌 小橋川親雲上朝祥)

尋ねる花が近くなったのであろう。忍び行くわが袖にまで匂うて来るような気がする。

この尋ねる花とは恋人のことである。恋人のいる所の近くにくると恋人の匂がにおってくるといっている。恋人にもうすぐ会えると思うと恋人の匂がするような気がするのである。匂の「しほ

らしや」にときめく思いを押さえかねている心情が伝わってくる。

いことばの花の
色や無いぬあても
たより押す風の
匂送る

(越の頂節)

言葉の花には、色はなくても匂がある。聞いてかぐわしい感を与えるものだ。それは何かの折に、風の吹き回しで送って来るように、自然に知ることができる。

色はないが匂のある言葉の花とは、人の心うちににじみ出てくる美しい言葉のことをいうのだろう。匂は内部から外ににじみ出るもののことを意味している。

以上のように「匂」が詠みこまれた琉歌をいくつか見てきたが、いずれの「匂」も美的なものとしてとらえられている。「匂」は「しほらしや」という語と深く結びついていて、十六例もみられる。それは、「匂」の美感が「しほらしや」という美意識にまで深められていったからであらう。

三、結論

琉歌世界で「しほら」は、「恋人」「愛しい人」の意で使われ、歌の中に詠み込まれた「恋人」への愛情は深いものばかりであった。「しほら」が詠み込まれた琉歌における美は、恋人の愛情に心を

動かされ、愛をかわしてくる恋人をより一層いとしく思っていて感じられる美であった。

「しほらし」は対象を修飾して「ゆかしい」「可愛い」「美しい」の意に使われている。

いと思う人を「しほらし」という語で包みこんで、いとしさを増幅させていく美しさであった。

「しほらし」は、句・音・声などと関係して詠まれていて「美しい」「可愛い」「すばらしい」「奥ゆかしい」などの意を表している。

「しほらし」は「句のしほらし」という形で詠み込まれたものが多い。この場合の句は嗅覚で感じる句ではなく、「春の明け明けに庭の雨戸おし開く花の句のしほらし」とあるように、美的な句のことである。

和歌世界で「にほふ」は、『青丹よし奈良の都は咲く花の句ふがごとく今盛りなり（万葉集 卷三 三二八）』とあるように、つやつやと美しく映ずるという視覚的な美を意味するものとして使われることが多いが、琉歌世界では内面からにじみ出る美的なものを表現して使われている。

また句は、会えない恋人同士にとって恋人の句が慰めになったように、「しほらし」という語に結びついて美的情趣を深めている。「句」と「しほらし」の接点に、歌心の感動がいろいろとともなって表現されている。

抒情文学が感動を歌うといっても、その感動にはさまざまな陰影があるものだが、「しほらし」は美的な感動を深く心に浸み入るように歌っている点で、琉歌語の中でも最も抒情的な表現語である

といえよう。

参考文献

- 外間守善『南島文学』角川書店
- 外間守善『沖縄の歴史と文化』中央公論社
- 外間守善・仲程昌徳『南島抒情―琉歌百選―』角川書店
- 外間守善編『沖縄文化論叢4 文学・芸能編』平凡社
- 外間守善『沖縄文学の世界』角川書店
- 島袋盛敏・翁長俊郎『標音評釈琉歌全集』武蔵野書院
- 阿波根朝松『琉歌古語辞典』那覇出版社
- 渡久地政宰『日本文学から見た琉歌概論』武蔵野書院
- 大槻文彦『大言海』富山房
- 『日本国語大辞典』小学館
- 『岩波古語辞典』岩波書店
- 中田祝夫『古語大辞典』小学館
- 『新編国家大観』（第一巻勅選集編）角川書店
- 『新編国家大観』（第二巻勅選集編）角川書店
- 日本古典文学大系『萬葉集』岩波書店
- 日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店
- 日本古典文学大系『新古今和歌集』岩波書店
- 岡崎義恵『美の伝統』宝文館出版
- 岡崎義恵『日本古典の美』宝文館出版
- 赤羽学『芭蕉俳諧の精神』清水弘文堂
- 『万葉集講座』（第三巻）有精堂

（しばた かずえ・一九九四年卒・外間ゼミ）